パイロット・航空管制官へのアンケート調査票

AURC

(Aerospace ＵＦＯ Research Center)

★人類の核兵器の開発と密接にリンクする

ＵＦＯ問題に関するアンケート調査票★

アンケートの内容にチェック☑、もしくは可能な限り詳細に文章でお答えください。

氏　名(任意：イニシャルでも可)

性別　　男・女

年齢　　歳

連絡先(任意：都道府県・市町村名でも可)

Address:

Tel　　:

E-mail :

勤務年数　□民間(P)　　年　　□JASDF(P)　　年

□ATC　　年　　※P(パイロット)　ATC(航空管制官)

退職(退官)年度　□S　□H　□R　　年

総フライト時間(総滞空時間)・他

民間(P)　・国内　　h　　・国際　　h

・所属企業名

・所属部署

・役職

JASDF(P)　　h

・Alert(Scramble)　　h

・所属基地(航空団)

・所属飛行隊

・階級

※　退職者(退官者)の方は現役時でご記入ください

ご提出いただきました本アンケート調査票は、個人情報保護法に基づいて管理し、今後のＵＦＯＬＯＧＹ(宇宙科学体系)の研究に役立たせていただきます。

Q1. ＵＦＯ(未確認飛行物体)問題に関心がおありでしょうか?

□ 大いに有る　□ 少し有る　□ 事件の内容による　□ 余り無い　□ 全く無い

□ どちらでもない　□ 存在が信じられない

Q2. ＵＦＯは「地球製の既存の飛行物体(ロケット・ミサイル・航空機・人工衛星・バルーン・ドローンなど) や自然現象(惑星・隕石・彗星・雷・雲・プラズマ・光学的反射など)及び鳥などの誤認とオカルト的心霊現象等を除く、物理的に解明不可能な高度な飛行特性を有した物体である」と定義付けられていることはご存知ですか？

□ Yes　　□ No

Q3. 第二次世界大戦中に各国のパイロットが遭遇し、互いに敵国の秘密兵器と想定していたという「フー・ファイター(炎の戦闘機・幽霊戦闘機)」と呼称された飛行物体をご存知ですか？

□ Yes　　□ No

Q4. 「英公文書館が第二次世界大戦中に英空軍の偵察機が、英海岸上空でＵＦＯの追尾を受け、当時の英首相ウィンストン・チャーチルに報告。それを受けたチャーチルは当時の欧州連合軍最高司令官ドワイト・アイゼンハワー(後の米大統領)と対応を検討。その結果、パニックを引き起こすとして、この情報を50年間機密扱いにした」ことを示す文書が公開され、2010年8月6日、メディア(AFP・BBC・産経ニュースなど)がこのニュースを報じましたが、ご存知ですか？

□ Yes　　□ No

Q5. 毎年6月24日の「国際ＵＦＯデー」は、米国ワシントン州のレイニア山頂付近における自家用機と9機のＵＦＯとの劇的な遭遇である「ケネス・アーノルド事件」を記念して設けられ、ＵＦＯという名称は米空軍の航空・軍事用語として採用されていることをご存知ですか？

□ Yes　　□ No

Q6. 1954年9～10月、英・ロンドンで連日正午に約50個のブリップ(輝点群)が地上レーダーに捕捉され、核開発が人類を破滅に導くという結論に至った、約20日間に及んだ「Ｕ＝Ｚ」ＵＦＯ事件はご存知ですか？(事件概要は別紙参照)

□ Yes　　□ No

Q7. 1958年1月16日、大西洋上のトリニダット島付近で、国際地球観測年の調査中だったブラジル海軍の観測船アルミランテ・サルダナ号がＵＦＯと遭遇、乗員のカメラマン、アルミロ・バラウナがそのＵＦＯを連続撮影し、6枚のうち4枚にＵＦＯが写っていました。その写真にはＵＦＯ本体がクローズアップで写し出され、ブラジル海軍省の公認するところとなり、世界中に大々的に報道され大反響となりました。
このＵＦＯ事件はご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q8. 1969年7月19日、午後6時頃(日本時間20日午前8時頃)、アポロ11号が月面着陸の前日に前面クローズアップカメラのテスト中に、2機連結のＵＦＯを撮影していましたが、このＵＦＯ事件をご存知ですか？(事件概要は別紙参照)

☐ Yes　　☐ No

Q9. 1984年12月18日の大西洋上と1986年12月21日の北太平洋上で、日本の水産庁所属の漁業調査船「開洋丸」が二度ＵＦＯと遭遇し、科学的調査に従事してきた観測・調査の専門家である複数の乗組員により目撃され、科学専門誌サイエンス(1988年9月号・11月号)に特集記事が掲載された「開洋丸ＵＦＯ事件」をご存知ですか?

☐ Yes　　☐ No

Q10. 1986年11月17日、アラスカ上空で日本航空特別貨物便(JAL Cargo)が約50分間にわたり巨大ＵＦＯと遭遇、クルー3名がその物体を目撃しました。
機に搭載の気象のレーダーや当初否定されていた地上レーダーもその物体を捕捉していたことが米連邦航空局(FAA)の公式見解により判明しています。
国内外のメデイアが大々的に報じた航空史上特筆すべき本事件をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q11. 民間航空の日本人パイロットによる下記の主要なＵＦＯ目撃事件で、ご存知のもの、あるいは聞いたことがあるというものがあればチェックしてください。

☐ 瀬戸内海上空ＵＦＯ事件(1965年3月18日：東亜航空・東京航空パイロット計3名が目撃)

☐ 西日本上空ＵＦＯ事件(1966年2月15日：全日本空輸・日本航空・東亜航空等、飛行中の5機の民間航空機パイロット計11名が目撃)

☐ 北日本上空ＵＦＯ事件(1971年10月3日：全日本空輸・日本航空・東亜国内航空等定期旅客機8機のパイロット計16名、地上管制官計6名が目撃)

☐ 甲子園上空ＵＦＯ事件(1985年10月8日：全日本空輸・日本航空・東亜国内航空・訓練中の自衛隊機等13機のパイロット13名以上が目撃)

☐ 北日本・東日本ＵＦＯ事件(2016年10月31日：北海道・東北・関東において早朝ＵＦＯが目撃され、新聞記者やアマチュアカメラマン多数が撮影に成功した。
また、TV局や空港に設置のライブカメラもその物体を捉えていた。

Q12. ＵＦＯと同義語である米海軍(Navy)で認証しているＵＡＰ(Unidentified Aerial Phenomena：未確認航空現象)という名称をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q13. 2017年12月19日、米国防総省が米軍戦闘機F/A-18E/Fが撮影したＵＦＯ/ＵＡＰの映像を公開しました。その映像をメディア(BBC・CNN・Newsweek・The New York Timesなど)が報じたのをご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q14. 2019年9月19日、過去に米軍戦闘機が撮影したＵＦＯ映像をＵＡＰ(未確認航空現象)として米海軍が正式に認めたニュースをメディア(CNN・Newsweek・The New York Times・産経ニュース・情報プレゼンターとくダネ!など)が報じたのをご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q15. Q13.で「Yes」とお答えの方に伺います。
2004年と2015年に米海軍パイロットが米西海岸サンディエゴ沖と同東海岸フロリダ半島沖で撮影した、ＵＡＰの写真あるいは映像を見た事がありますか？

☐ Yes　　☐ No

Q16. 2018年2月24日、米アメリカン航空機と同フェニックスエア機が米国・アリゾナ州南東部のソノラ砂漠上空でＵＦＯと遭遇した事件が発生しました。
この事件をメディア(USAトゥデイ・ABC二ユース・フェニックスニュータイムス・CNN・HUFFPOST・テレ朝news・東洋経済ONLINEなど)が報じたのをご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q17. 2018年11月9日、3機の航空機(英ブリティッシュ・エアウェイズ、同ヴァージンアトランティック航空、ノルウェーエアシャトル)がアイルランド南西上空で複数のＵＦＯと遭遇した事件が発生しました。
この事件をメディア(The Guardian・The IRISH Time・The Washington Post・New York Post・BBCなど)が報じたのをご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q18. 2019年4月25日、米海軍が「軍の航空管制圏や空域にＵＦＯの侵入例が増加傾向にあることを受けて、パイロットが説明不可能な現象に遭遇した際の報告手順を標準化する」と発表しました。
そのニュースをメディア(CNN・共同通信・日本経済新聞・朝日新聞デジタルなど)が報じたのをご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q19. 元自衛隊空将・佐藤守氏(総飛行時間3800時間)の著書、「実録・自衛隊パイロットたちが目撃したＵＦＯ」をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q20. 2017年10月19日、ハワイのパンスターズ1望遠鏡がとらえた、観測史上初の太陽系外から飛来した恒星間天体とされた「オウムアムア」は専門家により彗星や小惑星ではないかと議論されましたが、ハーバード大学天文学科長エイブラハム・ローブ教授は、オウムアムアは地球外文明から意図的に送られた探査機の可能性があるとの論文を発表し、ＩＵＯＣがその特徴を総合的に考察した結果ＵＦＯであった可能性が極めて高いという結論に達しました。「オウムアムア」の事はご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q21. フランスのGEIPANをはじめ、アルゼンチン(空軍)、ペルー(DIFAA)、ブラジル(政府)、チリ(CEFAA)、スペイン(国防省)、インド(インド軍) 等、世界各国には、公的なＵＦＯ調査・研究機関がある事をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q22. 日本には、公的なＵＦＯ調査・研究機関、部署が存在していませんが、その必要性についてどの様にお考えですか？

☐ 必要である　☐ あっても良いと思う　☐ あまり必要性を感じない

☐ 全く必要ない　☐ わからない

☐ その他(　　)

Q23. 過去のＵＦＯサイティングレポートを精査すると、①核実験場及び核武装基地(含む原子力施設)②地殻変動発生地帯(変動発生前後の期間)③先住民が構築した古代遺跡(巨石遺構や古墳)などでの目撃が顕著なのですが、ＵＦＯの飛来の意義と関係することなので、貴方の意見をお聞かせください。

※　パイロットの方に伺います。(Q24.～Q30.)

Q24. 過去、任務中にＵＦＯと推定されるものを目撃したことはありますか?
(含むレーダースコープ又はレーダースクリーン)

☐ Yes　　☐ No

Q25. Q24.で「Yes」とお答えの方に伺います。

目撃回数　　回

代表的目撃事例について以下の項目にお答えください。

目撃年月日	
目撃地点	
ＵＦＯの色	
形　状	
飛行状態	

Q26. Q24.で「Yes」とお答えの方に伺います。

報告する部署は設置されていますか?　「Yes」の方は部署名をご記入ください。

☐ Yes　　☐ No

↓

部署名

Q27. Q26.で「No」とお答えの方に伺います。

報告する部署を設置しない理由及び報告部署が存在しないことを、どのようにお考えですか?

☐ 必要ない　☐ 報告部署を置くほどの目撃数がない

☐ 報告があれば調査が必要になる　☐ 人員確保が難しい

☐ ＵＦＯの目撃を重要と考えていない　☐ わからない

☐ その他(　　)

《報告部署が存在しないことについて》

☐ 必要だと思う　☐ あった方がよい　☐ できれば作ってほしい　☐ 全く必要ない

☐ その他(　　)

Q28. Q24.で「Yes」とお答えの方に伺います。

目撃したことを報告しましたか?

☐ Yes　　☐ No

↓

その後、詳しい調査はありましたか?

☐ Yes　　☐ No

「Yes」とお答えの方は、どの様な調査でしたか?

Q29. Q28.で「No」とお答えの方、未報告の理由をお聞かせください。

☐ 安全上問題がなかった　☐ 報告部署がない

☐ 何かを誤認したと思った

☐ 報告するほどの事ではないと思った　☐ 報告後の調査が大変そうだ

☐ 報告したことで現職を失うかもしれないと思った　☐ 特に理由はない

☐ 理由を書きたいが書けない

☐ その他(　　)

Q30. 今までに同僚(その他の方)から、ＵＦＯの目撃談を聞いたことがありますか?

☐ Yes　　☐ No

↓

「Yes]とお答えの方

目撃談を聞いてどの様に感じましたか?

☐ 人工衛星・バルーン・ドローン・鳥等を誤認したのではないかと思った

☐ 他国の戦闘機等を誤認したのではないかと思った

☐ 惑星・隕石・彗星等を誤認したのではないかと思った

☐ 地球外から飛来した可能性があると思った　☐ 特に何も感じなかった

☐ その他(　　)

※　航空管制官の方に伺います。(Q31.～Q36.)

Q31. 過去、任務中にＵＦＯと推定されるものをレーダースコープ(含むレーダースクリーン)あるいは肉眼で目撃したことはありますか?

☐ Yes　　☐ No

↓

目撃回数　　回

代表的目撃事例について以下の項目にお答えください。

目撃年月日	
目撃地点	
ＵＦＯの色	
形　状	
飛行状態	

Q32. Q31.で「Yes」とお答えの方に伺います。

報告する部署は設置されていますか?　「Yes」の方は部署名をご記入ください。

☐ Yes　　☐ No

↓

部署名

Q33. Q32.で「No」とお答えの方に伺います。
報告する部署を設置しない理由及び報告部署が存在しないことを、どのようにお考えですか?

☐ 必要ない　☐ 報告部署を置くほどの目撃数がない
☐ 報告があれば調査が必要になる　☐ 人員確保が難しい
☐ ＵＦＯの目撃を重要と考えていない　☐ わからない
☐ その他(　　)

《報告部署が存在しないことについて》

☐ 必要だと思う　☐ あった方がよい　☐ できれば作ってほしい　☐ 全く必要ない
☐ その他(　　)

Q34. 機上のパイロットがＵＦＯを目撃していても、地上のレーダー機器にはＵＦＯの映像反応がしないことがありましたか?

☐ Yes　　☐ No

Q35. Q34.とは逆に、地上のレーダー機器にはＵＦＯの映像反応があるが、機上のパイロットが目撃できないことはありましたか?

☐ Yes　　☐ No

Q36. 地上のレーダー機器がＵＦＯ映像をピックアップした際、下記のどの種類のレーダーが観測しましたか?　該当するものに☑チェックしてください。

☐ ARSR(航空路監視)　　☐ ASR(空港監視)
☐ SSR(二次監視)　　☐ ASDE(空港面探知)
☐ PAR(精測進入)　　☐ その他(　　)

Q37. スクランブル発進の理由で「不明」とされるものがありますが、何だとお考えですか？

☐ 他国の航空機や戦闘機が通過して到着時には発見できないもの
☐ 気象用のバルーン等でパイロットが発見できないもの
☐ 鳥の群れなど　☐ 雲・彗星・隕石などの自然現象　☐ ドローンなど
☐ 地球外から飛来したものの可能性がある　☐ わからない
☐ その他(　　)

Q38. ＵＦＯを他国のミサイルと誤認する可能性があり、安全保障の観点からＵＦＯ目撃事件をオープンにするべきか否か、貴方のご意見をお聞かせください。

Q39. ＵＦＯは、どこから飛来しているとお考えですか?

Q40. ＵＦＯは、どの様な目的をもって飛来しているとお考えですか?
貴方のご意見をお聞かせください。

Q41. 近年、天文学の専門家たちが地球外文明・生命の存在を公言し研究が進められている一方で、メディアでは宇宙人と称する低俗な「グレイ」などや、また「緑の小人」及び「宇宙人の遺体解剖フィルム」などのフェイク情報が真実であるかのように放映されています。そこにはフェイク情報で多額の報酬を得る人々と、そのフェイク情報によりメディアが視聴率を稼ぐという構図がありますがご存知でしたか?

☐ Yes　　☐ No

Q42. メディアで何度も取り上げられた、アメリカ政府と宇宙からの訪問者とのコンタクトや調査・交渉をしていたとされる、アメリカ政府内の委員会「MJ-12(マジェスティック・トゥウェルヴ)」に関する文書と、それを行っていたとされる「エリア51」に関する情報は、検証の結果フェイク情報であることが判明していますが、この米国内でブームにもなった「MJ-12」と「エリア51」のことはご存知ですか？
(「MJ-12」と「エリア51」については別紙参照)

「MJ12」　☐ Yes　☐ No

「エリア51」　☐ Yes　☐ No

Q43. 1960年代に世界に先駆けて日本で設立されたＩＵＯＣ(国際ＵＦＯ観測隊)という組織名をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q44. 1980年代に日本で設立されたAerospace News Agency Sapporoという組織名をご存知ですか？

☐ Yes　　☐ No

Q45. 今後、ご自身がＵＦＯに遭遇(目撃)した際の取材協力についてお尋ねいたします。

□ 協力する　　□ 協力しない　　□ わからない

□ その他（　　）

Q46. ＵＦＯＬＯＧＹ(宇宙科学体系)への研究、参加についてお尋ねいたします。

□ してみたい　　□ 科学的な研究ならしてみたい　□ 既にしている

□ してみたいと思うがどうしたらいいのかわからない　　□ 余り思わない

□ 全くするつもりはない　　□ わからない

Q47. 民族学を研究、精査すると、過去人類が物質主義に傾倒して人間性を喪失、堕落したことで絶滅に至る程の天変地異(大洪水・地殻変動・彗星による宇宙的災害など)に遭遇したことが判明します。そして「その都度天(宇宙)より救済と援助の手が差し延べられた」という古代の民族の共通した記録が断片的ですが存在しています。

また、太陽が万物に等しく恵みを与え、且つなくてはならない存在であるごとく、古代の民はその救済者の精神的、肉体的偉業に感謝して太陽に匹敵、あるいはそれ以上の存在として太陽神または天空神と尊崇し、その搭乗機を太陽円盤(サン・ディスク)と呼称しました。

各民族が固有の風習、慣習としている文化や法(律法)及び古代の民族の共通した太陽崇拝思想、太陽円盤思想は、偉大な宇宙教師である太陽神が淵源となっており、主にネイティブである日本のアイヌや米国のホピ、ヘブライ(イスラエル)民族などに顕著に現れています。このような古代の歴史をご存知ですか？

□ Yes　　□ No

Q48. ＵＦＯを目撃された際にご記入いただくSighting Report(目撃報告書：日本語版・英語版)があることをご存知ですか？

□ Yes　　□ No

※　アンケート調査は以上です。ご協力有難うございました。
　　ご面倒でも調査票は記入後30日以内にご提出ください。

同業(パイロット・管制官など航空関係)の方(退職・退官者の方含む)で、
アンケートにご協力いただける方がいらっしゃいましたらご紹介ください。
よろしければこちらからご連絡させていただきます。

ご紹介いただける方

氏 名 _____

連絡先 Address: _____

Tel : _____

E-Mail : _____

職 業 _____

※ ＵＦＯを目撃されましたら、速やかにご報告ください。
Sighting Report(日本語版/英語版)及びアンケート調査票は、下記サイトよりプリントアウト可能です。

※ 国内外のＵＦＯ事件の概要はAerospace News Agency Sapporoのホームページをご覧下さい。

※ お問い合わせは、下記E-mailまでお願い致します。

Aerospace News Agency Sapporo 内

ＡＵＲＣ／ＩＵＯＣ事務局

Home page https://aerospacenews.org/
E-mail info@aerospacenews.org

◇　「Ｕ＝Ｚ事件」概要

ロンドン近郊各地のレーダー基地のレーダー・スコープ上に連日正午に約50個のブリップ(輝点)群が捕捉され、そのブリップ群は馬蹄形ないしアルファベットの「Ｕ」から二本の平行線「＝」になり、最後にアルファベットの「Ｚ」になり消える、という事件が約20日間続いた。

戦闘機がスクランブル発進するものの目標物は発見されず、軍首脳陣や政府はこの現象はＵＦＯが地上へ「Ｕ」(原水爆の燃料となるウラニウム)「＝」(イコール)「Ｚ」(アルファベットの最後)の文字隊形により、「人類が原水爆を使用すると地球人類に終末が訪れる」という警告を送ってきたとの解釈をした。

英国空軍の元帥ドウディングの『私は他の遊星の人たちがフライング・ソーサーを操縦して現今のわが世界の危機に、援助の手を差し延べられんとしていることを確信する。その証拠は圧倒的である・・』とのメッセージが示唆したように、ＵＦＯ飛来の意義の一端が明確となった事件。

◇　「アポロ11号ＵＦＯ事件」概要

アポロ11号が月を周る長円軌道を修正して円軌道に入ったのち、オルドリン飛行士がＬＭ着陸船“イーグル”に移り、ＬＭの全装置を始動させ、歴史的着陸に備えて最後の点検を行ったとき、カメラ(16㎜)のテスト中に突如ＵＦＯｓが飛び込んできた。

人類初のアポロ11号が月面に到達する以前に、すでにその空間にＵＦＯが存在していたという事実は、ＵＦＯが地球製の物体ではなく、紛れもなく高度な知性にコントロールされた他の惑星から飛来してきた物体であるという決定的エビデンスとなるのである。

ＵＦＯを撮影したマザーフィルムはＮＡＳＡからＣＢＡＩへの提供である。

【ＵＦＯ ＮＥＷＳ Vｏｌ.6 No.1(Spring-Summer 1974)ＣＢＡＩ】

(撮影者　ＬＭパイロット　エドウィンＥ．オルドリン)

◇　ＭＪ-12（マジェスティック・トゥウェルヴ）

アメリカの政府高官や科学者など12人の専門家で構成される、1947年に起きたとされるロズウェル事件をきっかけに発足した、アメリカ大統領直属のＵＦＯ問題を専門に扱う秘密機関の名称とされているもので、宇宙人に関する調査や、宇宙人とのコンタクト・交渉を過去60年に渡り秘密裏に行ってきたとされる。

「MJ-12の活動についての秘密文書」やトルーマン大統領の署名が入った手紙等が次々に発見され、更に国立公文書館の機密解除された書類の中から、アイゼンハワー大統領の補佐官ロバート・カトラーによる覚書が発見された。

それには、「MJ-12特別研究プロジェクトの概要説明」を1954年7月16日に予定されてい

るホワイトハウスでの会議で行うと書かれてあり、発見したTVプロデューサーは事実として公表、マスコミに取り上げられ、大きな話題となりブームとなった。
しかし、MJ-12に関する多くの文書は詳しく検証され、以下のような多くの矛盾点や間違いが見つかっており、偽物であることが判明している。

・日付けの書き方が違う　　・文書に登場する人物のサインが間違っている
・使用されたタイプライターは15年後に発売されたコロナ社のものである
・大統領命令の番号は初代からの通し番号だが、あり得ない番号になっている
・プレス(press)の代わりにメディア(media)、異星人(alien)の代わりに地球外生命体(extra-terrestrial)という単語を使用しているが、これらが一般化したのは1960年代以降である
・トルーマン大統領のサインが、他の手紙の中の同大統領のサインのコピーだった　等

また、カトラーの覚書も、同様の矛盾点・間違いが発見されており、更に当時カトラーが使用していた用紙に入っていた透かし模様が無い事や、「トップ・シークレット」の登録番号がないことも判明しており、カトラー文書も偽物であることが明らかになっている。
このMJ-12文書やカトラー文書を公表したTVプロデューサーの友人でＵＦＯ研究家でもある人物が、後にＵＦＯ墜落や異星人の死体回収について本を書いており、これらの文書の公表により金と名声を手にしていることから、彼の関与が疑われている。

◇　エリア51

ラスベガスの北120km地点、ネバダ州南部の高地砂漠にあるアメリカの軍事施設。
アメリカ最大の政府管理区域であるネリス試験訓練場(NTTR)の中に位置するが、政府は「エリア51」の存在を認めてこなかった。
情報公開し存在を公式に認めたのは2013年、それまでは地図からも抹消されていた。
今ではエリア51と言えば、「ロズウェル事件で墜落したＵＦＯの残骸が回収されている」「その時に搭乗していた宇宙人の死体も回収された」「宇宙人とアメリカ政府がコンタクトしている」「地球製ＵＦＯを宇宙人の協力で製造している」などといった噂が絶えず、「上空が飛行禁止になっている」「厳重な警備」「政府が存在を否定」などから、マニアの間ではこの噂が真実であると思われている。
しかし、エリア51は時代とともに役目を変えており、「マンハッタン計画」による核兵器開発・実験が隣接するネバダ核実験場で行われ、その後はソ連の監視を目的としたＵ2偵察機の開発・実験、無人偵察機Ｄ-21の開発・実験等が行われていたとされる。
現在も最新偵察機や兵器の開発が行われていると言われており、厳重警備は変わっていない。
情報開示がされるまでは、エリア51で働いていたとされるボブ・ラザーが、基地内で空

飛ぶ円盤と小さな宇宙人らしきものを見たと公表し、MJ-12秘密文書にロズウェルに墜落したＵＦＯと宇宙人の遺体がエリア51に運ばれたと書かれていたということから、世間の注目が一気に集まった。
本来であれば中で行われていることはトップシークレットであり、注目を集めることは避けたいはずだが、否定するほど更に注目が集まり、ＵＦＯ目撃情報も数多くあり国家の安全保障にも関わることから目撃情報を調査するというスタンスを取りそれらを否定してきた。
それでもブームは加速したため、アメリカ政府はこの噂を逆手に取り、本来の目的の隠れ蓑として使ったと思われる。
ボブ・ラザーはこの公表により一躍有名人となり、日本のメディアでも取り上げられ、金と名声を手にしている。
また各メディアも公表した事が真実であるかのように放映し視聴率を稼いでいる。
しかし、実際にエリア51で長年働いていた退職者達が、エリア51とＵＦＯ・宇宙人に関する噂について否定している。
更にMJ-12秘密文書は、それ自体が偽物であることが明らかになっており、ロズウェルに墜落したものは気象観測用気球であることが判明している。
これらのことから、エリア51とＵＦＯ・宇宙人に関する噂は、メディアとメディアにフェイク情報を持ち込む人々により作り上げられたものであると考えられる。